

ヤン＝ヴェルナー・ミュラー著、
古川高子訳

『恐怖と自由——ジュディス・
シュクラーのリベラリズム論と 21
世紀の民主制——』

みずす書房 2024年 v + 169 + 21 ページ

まつ おりゅうすけ
松尾隆佑

本書は、ポピュリズムに抗してリベラルデモクラシーを擁護する論客の筆頭ともいえるミュラーが、政治理論家ジュディス・シュクラーの議論を導きとし、リベラリズムの意義を問い直した著作である。原著は2019年にドイツ語で出版された。日本語版では、シュクラーの論文「恐怖のリベラリズム」が、あわせて訳出・収録されている。ミュラーは『ポピュリズムとは何か』[ミュラー 2017]において、自分たちだけが「真の人民」を代表すると謳う反多元主義に、ポピュリズムの核心を見出した。この洞察を踏襲して右翼ポピュリストの言動を批判的に読み解く点では、先に訳された『民主主義のルールと精神』[ミュラー 2022]も、本書と重なる内容が多い。

本書でミュラーは、日本でも人口に膾炙した感のある「リベラルエリート」批判が、ほとんどの外れだと指摘する。すなわち、国益とかけ離れた国際協力を唱道する「グローバリスト」は、存在したとしても政治的には無力である。大多数のエリートは特定国と強く結びついており、どこでもやっつけていけるエリートと地元を根を張る庶民の対比は、現実を反映していない。都市と地方の分断はおもに経済的なもので、都会の傲慢なエリートと田舎の住民に文化的対立があるように描くのは正しくない。コスモポリタンのでない生活様式を劣ったものと軽蔑するリベラルなど、実際はめったに出会えない。ポピュリストは想像上の敵と戦うなかで、幻影を大きくみせることに成功した。彼の診断に従うなら、リベラルの自己批判も結構だが、実在すら疑わしい「リベラルエリート」への攻撃を煽って利益を得た右翼の口を、まずは問題とすべきだろう。

著者によれば、自分たちが脅かされているかのように語る右翼が苦痛を具体的に示せないのに対して、マイノリティは現に嫌悪され、差別され、傷つけられている。ブラック・ライブズ・マターや #MeToo は大げさな多様性のレトリックで特殊な権利を掲げたのではなく、平等な人間として当然に認められることを、つまり警官に撃たれない権利やハラスメントを受けずに生きる自由を求めたにすぎない。問題は文化の次元にないのだが、ポピュリストはいつも文化闘争へと話をすり替える。そして自分たちの訴えを理解しない相手は「真の人民」ではなく、二級市民や裏切り者だとみなす。ポピュリストによる「○○人」の想定と一致しない集団やポピュリストを批判する者は、「○○人」に属さない存在とされるのだ。

対立を文化闘争へと還元させないために重要となるのが、シュクラーが提起した恐怖のリベラリズムである。彼女は、強い者が弱い者に苦痛を与える残酷さと、残酷さが呼び起こす恐怖に感応的であることを、リベラリズムの出発点においた。そして、あらゆる人を恐怖から解放するため、犠牲者の声に耳を傾けよと促す。この立場からすれば、文化を云々する以前に、恐怖に支配されている人びとを護ることが、リベラリズムの本旨である。シュクラーの発展の継承を試みるミュラーは、労働者を恐怖させる企業内の独裁にも視野を広げつつ、恐怖からの自由を権利によって請け合い、権力制限によって確かとすることを主張する。

リベラリズムの再解釈を経て著者が示すのは、デモクラシーへのコミットメントである。専門家に多くを委ねて民主的選択の余地を狭める脱政治化戦略をとれば、それもまた真の解決は1つしかないとする反多元主義に陥ってしまう。ポピュリストとの対話を拒めば、その支持者を無視することになる。彼ら彼女らが反多元主義者とはかぎらないし、支持理由は排外主義と別の部分にあるかもしれない。むしろ開かれた議論のプロセスにおいてポピュリストと対決しながら、さまざまな声に耳を傾けて包摂を図るべきだろう。もちろんマイノリティの恐怖が十分に聞き入れられる保証はない。それでも市民の判断を信頼して民主的決定に伴う不確実性に耐える選択肢を、ミュラーはリベラルに推奨する。

リベラルデモクラシーは生き残れるか。その答えを探すにあたり、示唆に富む一冊である。

文献リスト

ミュラー, ヤン=ヴェルナー 2017. 『ポピュリズムとは何か』
板橋拓己訳, 岩波書店 (Müller, Jan-Werner 2016.
What Is Populism? University of Pennsylvania
Press).

—— 2022. 『民主主義のルールと精神——それはいか
にして生き返るのか——』山岡由美訳, みずず書房
(Müller, Jan-Werner 2021. *Democracy Rules*.
Farrar, Straus and Giroux).

(宮崎大学教育学部准教授)